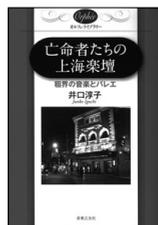


多言語資料を駆使し、上海の音楽 文化史を塗り替える好著

井口淳子著

亡命者たちの上海楽壇
租界の音楽とバレエ

四六判 248頁
音楽之友社
【本体 2,600円 + 税】

西村 正男

なんと、すごい本であろうか。本書を読み終えた最初の感想は、このようなものであった。書評子自身も、上海の音楽（とはいってもポピュラー音楽が中心ではあるが）を研究対象とし、資料の発掘にも積極的に取り組んできた。だが、上海の西洋音楽について複数の大きな脈を掘り当て、新たな資料に基づいて生き生きと描き出す本書には感嘆することしきりであった。

本書は、基本的には二〇世紀前半の上海における西洋音楽とバレエの歴史を扱ったものといえる。だが、本書の内容は単なる音楽の歴史にはとどまらない。租界が存在し、様々な民族が居住し行き交った上海ではあるが、これまでは単一の民族や国家（特に中国）からの視点からしか歴史が描けなかった。本書ではフランス語やロシア語を含む様々な言語で記さ

れた資料が駆使され、今まで不明であった数多くの謎の解明を含め、上海の音楽状況が克明に描かれているのである。

以下では、各章の内容を具体的に確認していきたい。まず、第一章「ライシャム劇場——西洋と東洋の万華鏡」では、上海最古の西洋式劇場であるライシャム劇場に焦点が当てられる。時期によって変動はあるが、上演演目には中国語による京劇、人形劇、話劇、歌舞劇などとオペラ・オペレッタ、バレエ、オーケストラ演奏などが混在していたことが複数の言語資料より明らかにされている。工部局オーケストラのライシャム劇場での演奏活動についての記述は、第二章へのイントロダクションになっており、また大阪朝日会館との関係についての記述は、第四章へのイントロダクションとなっている。本章は本書全体の概説的な役割を兼ねている。

第二章「上海楽壇——モダンリズムからコンテンポラリーへ」は、日中戦争期の上海における西洋音楽の演奏状況が詳述される。ここでは、先行研究では必ずしも十分に説明されていなかった具体的な演奏曲目に注目し、その結果、西洋音楽が上海においてほぼ同時代的に受容・演奏され、特に十二音技法も受容されていたことが明らかにされる。その際、資料として依拠されているのが上海在住のフランス人シャルル・グロボワによる音楽評論である。ここでもフランス語新聞の記事が駆使されているのである。また、この章に収められた「工部局オーケストラ上海初演曲および主要演奏作品一覧」も興味深い。特に日本の占領下では日本人作曲家による作品の演奏が増えることが見て取れるが、第四章でも触れられる山田耕筰の他、当時は「日本人」であった台湾人作曲家・江文也の「台湾舞曲」が一九四二年六月演奏されていることも個人

的には気になったところである。

第三章「上海バレエ・リュス——極東でディアギレフを追いつ求めたカンパニー」は、ライシヤム劇場を根拠地としたバレエ・カンパニー、上海バレエ・リュスの系譜をたどる。なかでも、セルゲイ・ディアギレフの創設したバレエ・リュスとの関係にも注意が払われる。これまで無関係とされることも多かった両者ではあったが、その間には継承関係があつて、

ディアギレフのバレエの再現を上海バレエ・リュスが目指していたことが述べられている。そして、ここでもまたグロボワによる評論が活用され、上海バレエ・リュスの状況を詳細に描き出している。

第四章「巡業するヴィルトゥオーソたち——興行主A・ストロークのアジア・ツアー」は、西洋の数多くの音楽家を日本および上海に招いた興行界の大物、アウセイ・ストロークについて論じられる。ラトヴィア出身のユダヤ人である彼は、一九一〇年前後にペテルブルクでオペラに関わる。この時期はオペラの最盛期であると同時に、バレエや現代音楽にとつても革新の時期に当たり、そこでの経験が彼のマネジメントの基礎となる。彼が個人的、あるいは民族的ネットワークを駆使して興行主として成功していく様は読み物としても面白い（著者はストロークの生まれたラトヴィアのユダヤ人村まで取材に赴いている）。彼は、一九一八年より著名演奏家やダンサーたちのアジア・ツアーを手掛けることになる。ここに収められた表「ストロークのアジア・ツアー上海公演および日本公演一覧」は、英字新聞データベース、フランス語新聞、日本のプログラム実物などから作成された力作である。これまでに日本と上海の音楽興行はそれぞれ別個に語られがちであったのが、西洋人音楽家のアジア興行は、日本と上海双方を一つ

のパッケージとしたツアーとして行われていたことが明らかになったのは大きな成果である。

第五章「外地と音楽マネジメント——原善一郎と上海人脈」は、そのストロークの日本における右腕として活躍し、後に上海工部局オーケストラを改称した上海交響楽団の主事（支配人）を務めた原善一郎に焦点が当てられる。原はハルビンでロシア語を学び、一九二五年の「日露交歓交響管弦楽演奏会」を手配したことから、日本交響楽団の支配人となる。個人事務所でストロークとの共同事業を手掛けた後、日中開戦後は上海に移り、太平洋戦争期になると上海交響楽団の主事となる。上海時代においては、山田耕筈の演奏会を成功させたほか、朝比奈隆とも接点があり、その音楽マネジメントの方法は戦後の日本でも受け継がれていく。

以上が本書の主な内容であるが、第四章を除く各章の末尾に付されたコラムも興味深い。第一章の末尾では租界、映画、レコード、ラジオ放送などの状況について補足がなされ、第二章の末尾では上海工部局オーケストラ、国立音楽院の紹介の他、グロボワらの人物紹介がある。第三章の末尾では上海バレエ・リュスやその主要人物について紹介される。第五章の末尾には朝比奈隆の上海体験を紹介するコラムがある。これらは本文の内容を効果的に補足している。

あとがきにもあるように、本書は科研費による共同研究「1940年代における上海租界劇場芸術の連続性と他地域への展開の諸相をめぐる研究」（代表・大橋毅彦）での成果を発展させたものである。様々な言語に秀でたメンバーが参加した共同研究における刺激が本書につながったことは想像に難くない。本書は、様々な言語の資料を利用することで新しい視角や貴重な資料を手に入れ、これまでの上海文化に対する研究を大きく前進させているのである。

ただ、著者の興味は、上海における西洋音楽の歴史を通時的に再構築することにあつたと思われ、上海の「孤島」期、日本占領期（淪陷期）それぞれの複雑な文化状況やプロパガンダ工作については記述が薄い印象を持った（なお、四九頁では、一九四三年の租界の汪政権への返還後を「淪陷期」とよぶとされているが、通常は太平洋戦争勃発による日本軍の租界占領以後を「淪陷期」とよぶのではないだろうか）。特に、日本側による文化工作については、原善一郎について論じた第五章で彼と特務機関とのつながりに触れられるものの、彼の活動の政治的意味については考察があまりなされていないように思われるし、それ以外の章ではほとんど触れられていない。上海バレエ・リュスと小牧正英ら日本人との関係については、本書でも参考文献として挙げられている星野幸代『日中戦争下のモ

ダンゲンス——交錯するプロパガンダ』（汲古書院、二〇一八）が本書の内容を補う資料となるだろうが、それ以外についても今後の研究が待たれる。

また細かいことではあるが、誤記などと思われる点を列挙すると、一四頁のルビ「チンホアンユエ」は「チンホアイユエ」のほうが近いだろう。また、五〇頁の「晔兒」は「聶耳」が正しい。一四七頁では「晔耳」とされているが、中国の簡体字を混在させずに「聶耳」とすべきであろう。同じ一四七頁の「周旋」は正しくは「周璇」。二二二頁の注（七）でも中国の簡体字と日本の新字体が混在している。

とはいえ、これらは本書の僅かな瑕疵に過ぎない。本書は資料としても今後の研究に益するところ多く、多言語資料を用いた研究の可能性を切り開いた好著である。書評子自身も

本書によって研究意欲を喚起させられた。上海あるいは東アジアの様々な芸術文化を研究する諸氏もきつと同様であることだろう。

（にしむら・まさお 関西学院大学）

石 碩著

謝朓詩の研究

その受容と展開

六朝を代表する詩人であり、唐代の詩人に大きな影響を与えた謝朓の詩は、如何にして誕生し、後世に受け継がれ、今日の地位を獲得したのかを系統的に論述。従来の文学史的観点を覆す新たな知見を提示する謝朓詩初の専著。

5500円

土屋英明著

続中国艶書大全

『老子』から現代の書物まで、あつと驚くような中国の房中（性愛）術の本から約五十編を厳選し、梗概・書誌を示し、その要所を原文とこなれた訳で味読する。

2400円

▼好評既刊 中国艶書大全

2400円

研文出版〈税別〉

東京・神田神保町2-7 ☎3261-9337
<http://www.kenbunshuppan.com/>